

## 地質学とともに

水野篤行

昨年六月一日、城北学園で行われた城北学園同窓会総会と懇親会に久々に出席し、会場で一期生の友人とも久しぶりに会い、歓談することができた。

私の自宅から城北学園までは、地下鉄丸の内線の東高円寺駅前で新宿―板橋のバスに乗れば直行できて便利である。バス停（小茂根）と学園の間に石神井川を越える橋がある。橋上から眺めると、川の周辺には昔日の風物が残っているような感じの田園の一端が見られ、城北中在学時を懐かしく思いだした。この川は在学中、城北の校庭からほど近くに見えるものである。

昨秋のある日、新宿に出たついでに市ヶ谷まで行き、左内坂を往復してみた。「城北二期の会」をアルカディア市ヶ谷で行うたびに、一学生時代に通学の都度お世話になった左内坂の入口を窓越しに見下ろして、懐旧の念にかられていた。坂は都内でも指折りのたいへんな急坂で、上るのは、八五歳の身にはたいへんきつかった。元気な一年生時代には、登校の都度の急坂上りを全くものとも思わなかったであろう。

私は、小学校から中学―大学時代を通じて、東急線の田園調布駅から徒歩七―八分の距離、多摩川に近い台地のへり近くに住んでいた。多摩川の低地に下りていく坂道の途中に高さ一メートルぐらいの崖に黄白色の地層が現れていた。それを見るたびに、どんなものなのか？ どのようにしてできたのだろうか？ また田畑の低地と住宅地の台地はどのようにしてできたのか？ と関心を持っていた。これは、大学入学時から現在まで六十年以上となる私の地質学との関わり合いの端緒であった。

五十一年三月に大学の理学部地質学科を卒業、五三年一二月に通産省地質調査所（現 つくば市の産総研地質調査総合センター）に入所。

以降約三十年間にわたる同所で日本列島の地質の成り立ちに関する研究を始めることになる。七十年台後半の五年間には調査船に乗って、毎年六十日間の中部太平洋底の海底調査を行った。

その後フィリッピン国の海洋地質調査に対する技術協力、中国の青島海洋地質研究所での集中講義などの国際的な研究協力・交流活動や、国内の大学での海洋地質学に関する講義などを頻繁に行う機会に恵まれた。

地質調査所在勤中のある日、同所の先輩の山口大学教授から突然電話が入り、「定年退職後、後任を頼みたい」との話。東京からは遠地であるが転出することにした。その後の愛媛大学時も含めて十三年間にわたって西日本での单身生活を送ることになるうとは、そのとき夢にも思っ

てなかった。

八十五年四月に山口大学理学部地質鉱物学科に移り、地質学関係の講義と進級論文・卒業論文の指導もすることになる。

八十八年の夏、中国の北京で国際研究集会があった。家内同伴で出席。集会のあと、チベットの地質見学旅行があり、観光を兼ねて参加。ラサ市に着いた晩、ホテルで就寝中に家内が意識不明となって、直ちに市内の陸軍病院に搬送され、脳梗塞で「この数日が生死の境目」と診断されたが、幸い生還できた。

家内がラサ市で入院中に、同市に滞在していた地質仲間の研究グループとホテルで偶然会う。たびたびの雑談を楽しんでいたが、帰国で同市を離れる前夜、「愛媛大学に来てもらいたいかどうか」との話が突然飛び出した。帰国後、その話を受けることとし、翌年三月下旬に、瀬戸内海を南に渡って松山市の愛媛大学理学部に移った。

松山市での日常生活、大学生活も山口の時とほぼ同様。

ある日突然、(故)成澤博夫君から「松山に来ている」との電話が入り、その夕、瀬戸内海の魚料理で久しぶりの会食を楽しんだ。

愛媛大学を定年退職後、日本地質学会の事務局長を委嘱され、約十年間にわたって、その責務を果たした。その間、若手の研究者と様々に交流できたことは、私にとってまことに有意義であった。

最近では、齢も齢、地質学の研究は完全にストップしているが、以前から日本地質学会から依頼されて引き受けている地質学用語辞典の編集作業を遅々として進行させて会員に迷惑をかけ、時折、学会仲間とメール連絡している昨今である。また趣味として、広くはない庭でバラいじりを楽しんでいる。

最後に、私は、地質学の範囲内ではあるがかなりの程度に偶然に支配されながら、あちこち動いてきたという感じである。